

「ちょうだい……拓ちゃんのセーエキをたっぷり注いでちょうだい」

拓は注いだ精液がこぼれてないように、真奈美の両足を肩にかけた。自然と尻があら、地面に対して垂直に近い角度で抽送する形になる。

「全部、一滴残らず子宮に流しこむよ」

「うん、全部……ちょうだい。あたしのなかに全部注いでえ！」

悦楽の色が真奈美の顔に浮かび、蜜が溢れた接合部からチュブチュブと粘っこい音がもれる。

真奈美の肢体は、拓の体液を受け入れる喜びを桜色に上気した肌と溢れる蜜、そしてペニスへの締めつけで表現し、拓の勢いを揺れる乳房で表わした。

（綺麗だ……）

拓は自分のすべてを注ぐために、激しく腰を叩きつけた。

真奈美の白い腰を伝う振動が、彼女の豊かな乳房を震わせる。

「あっ！ ひっ！ いっ！」

真奈美の肢体はまるで冬の朝のようにブルブルと震え、細切れの喘ぎ声があたりに響く。

「いくぞー！」



拓は動きをいっそう激しくし、愛液で白くデコレーションされたペニスで、真奈美のなかをぐちゃぐちゃにかきまわす。

「……ひうつ!! あつつつつ!!!」

純白の羽がひろがり、金色の輪がさらに輝きを増して真奈美を照らす。

天使と結ばれるという高揚感が、さらに拓を後押しする。

ぎゅうううつ!

真奈美の膣が収縮し、拓をさらなる奥へと迎え入れた。

「ううつ!」

その瞬間、ペニスに伝わる快感が、拓の限界値を一気に突破した。

どばっ!! どばっ!! どばっ!!

一番奥でペニスの先端から噴きだした液体が、ペニスに押されて真奈美のなかへと勢いよく流れこんでいく。

「……あっ……」

全身を激しく痙攣させながら、真奈美は拓に深いキスをした。

それはあまりに甘く、激しいキスだった。

拓の精液を受け入れ、真奈美は満足げに肢体を震わせていた。

一面に敷きつめられた羽の上に身を横たえ、拓と真奈美は体を寄せ合った。

「変よね。どう考えても試験失敗なのに……どうして嬉しいんだろ」

真奈美は風に舞った羽をつかんだ。

「拓ちゃん、遊園地楽しかったね」

「気に入ったんなら、また行こうか」

「そうね。行きたいね」

空々しい会話がづく。

拓はこの時間がずつつづかないことぐらいわかっていた。それでも、それを願った。

刹那、突風が吹き、羽がいつせいに舞いあがる。真奈美はまるで羽の一枚のようにゆらりと立ちあがった。

「お別れみたい。試験期間終了だね」

だんだんと色合いが淡くなっていく。

「……ねえ、拓ちゃん。あたしが存在しなくなっても、あたしのことは忘れないで」
「無茶を言うな」

「やっぱり、無茶だよね」

寂しげに笑い、真奈美は翼を大きくひろげた。

「それじゃ拓ちゃん、みんなによろしくね。きつとみんなも、拓ちゃんもあたしのことを忘れると思うけど」

ゆつくりと羽ばたき、フェンスの上に身を躍らせる。

「天界って、つまらないのよね。ビールもタバコもないし、拓ちゃんも千春ちゃんも……誰もいないもの」

「じゃあ、残ればいいじゃないか。試験判定なんてさぼっちゃまえ」

「こら、お姉さんを困らせるもんじゃないわよ」

見慣れた……そしておそらくもう見られない笑みに、拓の心が揺れる。

「それじゃ、本当にさよなら。拓は合格してよね」

真奈美は羽ばたき、空高く舞いあがっていった。

拓は彼女が見えなくなるまで空をずっと見あげつづけた。